

令和2年度 西砂学習館運営協議会第9回（令和3年3月）会議録概要

日 時：令和3年3月6日（土）午後1時30分～4時00分

出 席：大橋 加藤 広瀬 進藤 森 増田 小笠原 長谷川 岩元 小林

事務局：石川 俣本

欠 席：なし

1. 開会のあいさつ

大橋：7日に緊急事態宣言が終了するかと思ったが、2週間の延期で21日迄となった。これまでと同じように感染予防に気を付けなくてはいけない。前週から比べて増えてしまっている状況で本当に2週間後に宣言が解除されるのかと思いながら、生活をしていかななくてはいけないと思っている。

今日は令和3年度の行事を検討し企画をしていく部分と、懸案となっていた地域学校コーディネーターとの話し合いについて石川係長が資料等を用意したので、話し合いの前に知っておいて頂ければありがたい。

2. 令和2年度地域活性化講座について

(1) 来年度のスケジュール案について

・開催日程等の検討

石川：資料2-2は今年度の地域活性化講座の実績と、3年度もこのような形で行いたいと考えていることが記載してある。毎月行う運営協議会で決定していければと思う。大まかな日程配分を決めて頂くと部屋の確保等の事前準備が出来る。前回は話題になったが西砂産業まつりについてご検討いただきたい。

大橋：具体的な日程はどの箇所を見ればよいか。

石川：令和3年度の備考の欄に丸々記載してあるが、概ね何月位に行うか検討して頂きたい。地元を学ぼうのところで何も決まっていないが、去年豊泉喜一先生に色々教えてもらった中で十五夜の晩に何か出てくる砂川の話があるらしい。9月21日火曜日はちょうど十五夜なので、施設は予約しているが仮の仮なので委員のご意見を頂き、方向性を決めて頂ければ事務局の方で準備が出来るし詰めやすい。

大橋：先ず日程の方を決めておかななくてはいけない。松中小学校の令和3年度夏休みは分かれますか。

小笠原：予定を頂いていないので分かりません。

大橋：西砂小学校は、始まりは7月21日、終わりは8月26日までとなっていて、火曜日は5回ある。只、予定を見ると21日の火曜日は水泳教室と学習教室を行うと記載があり、子どもの出が悪いかなと思った。最終日は算数の①・②と記載があった。火曜日の5回は確保出来ると思ったが、松中小の様子が分からないので分かった時

点で構わないが、27日の火曜日から8月31日のまでの部分では5回は確保出来ると思っている。

小笠原：市内小中学校で聞いているのは概ね7月27日に終業式が多いようなので、同じではないかと思う。

大橋：大体4回または5回かなと思っている。「地元を学ぼう」で石川係長からも話があったが、ここの地域の民族や風習の部分と地元を学ぶ講座を出来たらと思う。岩元委員を介して豊泉先生と事前に話し合う時間を設けられたらと思う。

民俗学的な、伝統的な行事をお願いすることが出来るのかや更にエリアを広げた地域を知ることもあるので1回事前に話をしてみたいと思う。9月21日は十五夜なのでイベント等を行うならと、場所も確保している。

広瀬：全部日程を決めているが、前回から1つ1つの項目について話していて決定まではしていない。どれをどのように行うかを決めてから日程に入らないといけない。

大橋：どのような決め方を行ったらいいか。

広瀬：行こうことが去年と同じようにあるが、去年行ったけれども今年は辞めよう等や新しく付け加えよう等やその他のところの追加等の意見を聞いていく形にしたらと思う。前回沢山話し合ったが結論が出ていないと思っている。

大橋：実際に石川係長と3月・4月に具体的な日程調整等を決めていければいいのかなと思うので、広瀬委員からは具体的にどのようなことを行うかのところを先に決めてみてはどうかとのご提案なので話を進めていければと思う。

広瀬：フリースペース西砂も今まで行ってきたことを踏まえて、これからどうするかを多少話し合った方が良くと思う。何にも触れないでそのままは良くない。

大橋：在り方自体も当初始めていたものとは少しずつ変わって来ている。コロナ禍で取組自体ができる内容か否かがポイントになる。

小笠原：育成課として4月からフリースペースを中心に食の事業を再開する方向で動いている。そのことを受けて児童館内で検討させて頂いて未だ仮段階だが、4月は準備になり開始は難しいが、5月をスタートと考えている。開催日は第1・3土曜日の予定。地域のフードパントリーが重なっているため、日程調整が必要になるが、フリースペースを優先していきたいと思っている。内容について児童館の意見になるが、今の子ども達の状況を見ると二極化している。料理教室のように親御さんが美味しいものを作るから「いってらっしゃい」と送り込んでくるお子さんと先ずは自分の力で食べることを確保する、作ってみることから学ばなくてはいけないお子さんがいる。フリースペースは、居場所と子ども達の自立心を後押ししてあげたいとの思いがある。正直、おにぎりやお味噌汁を作るところから再スタートして提供していくことが今のニーズなのでとの意見が結構出ている。児童館の行事で、去年・一昨年と柏餅を作った。コロナ禍になりこねたりする行為等が難しくなっている。フリースペースが再開出来ることになったので、5月5日をスタートの形で大きくPRする。職員の意

見が一致したのはおにぎりをラップで握り、後は、簡単な卵焼きとお野菜でお弁当の形にする案。栄養素の3元素になるが、たんぱく質・脂質・糖質・ビタミンが揃った献立を自分で整える、体験をさせてあげることもフリースペースとしてありなのではないかなと児童館として意見が出た。そのような形で次年度からフリースペースの楽しくお料理をするだけではない、子ども達の生活力を後押しするような内容で進めていけたら良い。

小林：今の大筋を行っていておかずを作ったものを置いておいて、お弁当風に自分で詰めていくとか、そのような方法も1つ勉強になると思う。今までは好きな献立の希望を取っていて進歩したのは、黒板に書いて準備から出来上がりまで児童が行うことを説明したことと思う。やり始めたらおむすびから始まるお弁当がテレビの中でも沢山出ていて商売でもある。子どもも自然に目に触れていると思うし、そこから再開することはとても良い。

大橋：小笠原委員の話聞いてフリースペースの当初の居場所の部分と自立心の部分の2つがあり、居場所の部分がとても多かったと思う。今の子ども達に何が必要かは自立心で、自分で何とか食を手に入れる、作って生活していけるような力を手に入れることが1つ大きな問題になっている。スタートの時期も子どもが自分で食を得るならば、どこかでは行うが初回はおむすびを自分で作って、簡単な栄養価を整えて見た目も含めて実際に子どもが作ってお弁当に詰める。自分で昼食を用意出来る力を育てたいと言っているのかなと思った。子どもが作って食べられる力を1年生から6年生まで段階的に育てていきたいと小笠原委員は仰っていると感じた。

小笠原：インスタントラーメン1つでも麺をゆでるだけではなく、何かをのせる等の生活の知恵を知らないから、スナック菓子や買った唐揚げ1個でお昼を済ませようとする子が多い。そこまでする必要があるかなとも思ったが、行うことが必要な時期にきている。あとは年間を通して見た時に、小林委員の言葉の中に成長があったが、1年を通してご飯が炊けるようになろうとか、何かが切れるようになろうとか3か月ごとに目標を定める。その後に伝統のお月見行事等があって、行事色を織り交ぜていければ理想だなと思う。

広瀬：児童館がそのようにしっかり考えてくれて素晴らしい。

大橋：学習館の活動も最初がそうでしたけれども、児童館に移管した形で趣旨は踏襲してもらい児童館で実際に行って頂く。費用面もここから出していないし、相当の部分を児童館の活動費の中から出してもらっている。その部分で児童館が主催で子どもを預かっている立場で、多分一年間、二年間の見通しの中で子どもを育てていきたい趣旨もあると思う。計画をして頂きお手伝いをして下さる方を求めれば良いと思う。趣旨は活きているのだろうとっていて、子どもの居場所として児童館はいいのかなと思う。上記の部分を広瀬委員が心配されていて学習館側からお金の部分は分からないし支援等を心配してくれているかもしれない。

小笠原：児童館が大きな柱になっていることを育成課も認識していて、フリースペース西砂のような食の事業を再開させたいと話していた。児童館だけではなく地域にきちんと協力を頂いた中での行事から再開していくべきことを大事に考えている。独自に行うクッキングは後回しでもいいと思う。費用面等は全部年間予定に入っているので全く問題はないがあくまでも地運協の1つの事業として、場所や費用の面でも児童館との共催になると思う。

大橋：児童館で1年を通して子ども達の面倒をみたいとの強い思いが伝わってくる。

小笠原：職員だけで行うことは簡単だが、地域の大人が子ども達のところに来てくれ教えてくれる、一緒に行ってくれる姿は職員だけでは育てられなかったもので、そこを失わないようにと一貫している。

大橋：地域の人が入っていくことは方法論としてはいいと思う。地運協や学習館を地域の文化の拠点としての全く同じ狙いの活動と思う。計画を立てる大本が児童館で子どもの育ち・学び・力を育てるとの願いがある。そのような部分では主体的に計画を立てて頂いても良いのかなと思う。自立する子どもを育てていくお手伝いを外部の人達で行っていったらいい。

広瀬：大橋会長が説明してくれたような考えをはっきりしたらいいと思う。来年度からはその考えを前に進めていこう。今までは、はっきりしていなかったが来年度は児童館に色々と考えて頂いて、児童館も地運協との共催を望んでいるのであれば、委員も手伝いをしましょうとなる。

大橋：主体的な部分は児童館になるが発足の時の子どもの居場所も十分加味して踏襲して下さっているので、活動日も第1・3土曜日は動かさなくて、スタートは5月になる。より子どもの自立に焦点を充てられたプログラムになっていく。

石川：前回の会議で「認知症予防講座」を毎年行っても良いとの話がでたので、来年度も続けていく。「西砂の災害を考える」は大橋会長と西砂の自治会の連合会議の冒頭に説明させて頂くチャンスを受けた。「西一元気通信」の紹介、出来れば今後「西砂の防災を考える」に自治会の防災担当の方、若しくは会長か副会長に参加して頂きたいとお願い出来るチャンスを受けたので、講座を開催の有無、開催する場合は大まかな開催月までを決めたい。その他に「地元を学ぼう」は豊泉喜一先生にお願いする方向でよろしいでしょうか。西砂産業まつりについて具体的なこと、食材の提供は児童館のイベント費で児童館の中で行うには何とか大丈夫かもしれないが西砂会館で行うと食材費の心配があり難しくなるところがある。

大橋：「認知症予防講座」について毎年行ってもいいと思う。同じ人でも、1人でも新しい人でも来て頂き、生活の中で取り入れて頂けたら良い。「西砂川での災害を考える第6弾」については西砂支部の集まりがあるので、そこで話をさせて頂いて学習館で計画している内容を自治会の会長等にお話ししてみてもどうかと思った。開催の方向で内容のアイデアはまた頂けたらと思う。地域・自治会を巻き込んだ形で行えたら良

いのかなと考えた。森委員はHGU（ハグ）の話をしてくれたけれども、西砂川に特化したことや水害となると詳しい話は難しくなる。あとは自治連がどのような課題を持っているかが分からない。

岩元：自治会によっても課題は違ってくる。団地が抱えている課題や貧困住宅で沢山戸建てが出来ている地域、古い人と新しい人の交じり合い地域等の課題はそれぞれに違っていると思う。逆に自治会長から課題をもらい学習館の「西砂川で災害を考える」の講座の題材にする。そのことによって「自治会の皆さんにも是非参加して下さい」と声掛けをする。それぞれ分かっているが、この地域一体となった時にそれぞれ違って1つにまとめることは難しいのかなと思う。

大橋：これまで行ってきたことを具体的にお伝えすると思う。今後も防災についての講座を開いていきたいので、自治会も含めて参加してほしい意味合いで依頼をしようと思っているが、その時に1つそれぞれの自治会で課題になっている部分をお聞かせ頂ければ、また講座に組み込んでいくことも出来るので、ご意見を聞いてくる。

石川：お伝えに行くのは3月21日の日曜日。

岩元：学習館が行ってきたことを、自治会長も毎年変わってくるのでご存じない方が多いのではないかと思う。

大橋：学習館の活動を知って頂き協力をしてもらいたい。各自治会へ課題を聞いてみることも1つの方法なのではと思った。そのことを踏まえて出掛けていったらいいと思う。

広瀬：委員がやる気を出していることは良いことだけれども、ここで学習館が防災のことでリーダーシップをとることはまだ少し無理と思う。

大橋：地運協が地域で必要なものはこのようなものではないかと考えて行ってきただけで、地域がどうだったか分からない。今度はもしかしたらより自治会が抱えている地域に密着した課題や問題かもしれない。その辺りは上から目線ではいかなくて、ご協力を願いたいスタンスで頭を低くしていきましょう。

石川：「西砂での災害を考える」は秋口頃に行くことをお話ししてもよろしいでしょうか。

岩元：毎年、関東大震災の9月1日に合わせた形になっている。どのように関連付けるかが課題となっている。それぞれ単一自治会でも行うし、支部や市も行ってどのように絡んでの時期が大切。

加藤：冬よりも防災についての集まりが地域でもあるので基本的に秋がいいと思う。

大橋：例えばだが、一番町の自治会が防災の講座について9月中旬くらいに行うよとの情報をもらって来られるかもしれないし、重なってしまう可能性もある。

石川：防災課から聞くとやはり9月1日の防災の日が、1番盛大なイベントになってその後に単一自治会とか地区で11月の頭くらいまで参加するので、防災課職員は土・日曜日に休みがないらしい。多分そのような形で動いているので、前回は10月前で本来は11月下旬くらいが丁度一段落つくので、その時期がいいのではないのでしょうか。

加藤：このイベントは自治会と上手く連携するかがこれからの1番大きなポイント。自治会

と調整し、9月から12月上旬くらいに行えたらいい。

岩元：この地域では松中団地の炊き出し用の釜等で、地域の方達みんなに炊き出しまで行っていることが1番の大きな防災訓練になっている。自治会が持っている消防団が炊き出し用具まで全て揃えて行っている。団結力がすごいと思う。

大橋：お話を聞いていると各自治会の現状や取組の様子から、活動がいつ頃ある等の情報を聞いて計画を立てて協力をしてもらう。協力してもらえれば重ならない日程で考えていかななくてはいけないので、あくまでも自治会の方の現状のお話を聞かせてもらえたらと思う。

加藤：いずれにしても上手く自治会と連携出来るかどうかが今回の大きなポイント。前に話したあまり活動していない自治会とコラボを行えばいい。来年・再来年と各自治会でコラボを順番に行ってみるのも良い。

石川：西砂支部の役員会で、そこでコロナを踏まえて5月の総会を行うかどうかの確認をされると思う。前は紙を配っただけらしいが、今回は掘下げて話し合う会合とのこと。冒頭で大橋会長と私が協議会等について5分くらい説明をさせて頂く予定。

岩元：防災担当は西砂自治会会長のイシグロさん、天王橋自治会はワタナベさんが担当。

石川：「夜間塾」は、年2回予定。なるべく1回目を早めに行うと2回目はまだ日程を決めなくても良いので、1回目をいつくらいに行うかを決めたい。

大橋：まず会場を決めたい。前は違う場所での開催についても話が出たが実際には保育の問題等もあるので、児童館で行うと保育の部分がクリア出来る部分もある。年2回の開催ですが、日程がくっついてしまうと大変なので今度は空けた形で行いたい。

小笠原：児童館の年間行事を確認すると7・8月は不可なので、今は6月ですと調整はきくかなと感じ、そこを逃すと秋の行事に入ってくると思う。

大橋：場所を変えるとなると費用の問題も発生し大変。

石川：食費も掛かってしまう。講師の予算は学習館になりなる。

大橋：場所を変えると軽食も提供出来なくなってしまう。実際に講座の目玉になり、金曜日の夜がいいのではないかとの話になった。

小笠原：1つ費用面のことで前は申し上げたが、やはり地運協と児童館の共催の形ですと、児童館行事としてもうたえる訳ですので、「出張児童館」の仮名称で児童館職員が出張しての行事となれば、館外行事となり予算を組んでいるので付く。

大橋：前回からお話が出ているように西砂会館のように普段開催出来ない集まれないところで講座が出来るのだとすれば、児童館を中心にして活動場所も移動出来る実績を作れば、今度は天王橋会館で行うと話が膨らんでいく。

小笠原：さらに言うなら西砂会館のような会館ならば、児童館では調理に限界があるが親御さんの中から要望が高いような栄養価のこと等の実習が出来る。食材費は共催で児童館が持つことになるので開催可能と思う。

大橋：西砂会館の調理機器は大丈夫と言ってくれたので開催も可能と思う。費用が得られるかが一番のポイントになっていた。そこから保育のことは職員がいてくれたのである程度手当て出来ていたが、そのように出張の活動として認めて頂けるようなものであれば活動の幅が広がる。

小笠原：地域に出る方をメリットとして取ります。

大橋：6月に西砂会館で開催は難しいかもしれないが可能性があるだけでも聞いてもらってもよいと思う。

石川：1つ提案になるがここで意見が出ていた行方講座自体を食の講座にしてしまうことにすれば小池先生の講座の中で扱う、缶詰やインスタントラーメンにスポンサーが付いているので食材を持ち込んでくれる。何回行っても面白い。カップラーメンをアレンジして食事を作ればいいと思う。お父さん、お母さんがいない時にカップラーメンをお湯で戻して、ちょっと手を加えるだけで美味しいご飯になり、親子で参加出来るかなと思う。そうなれば少し材料費がかかる分だけ、委員から200円位集めるだけで済むと思う。

大橋：只、ベースは子育て世代のところは崩さないで、講師が小池先生は構わないと思う。保育の確保等のベースをしっかり押さえた方がいいと思う。その上で児童館以外の場所で活動でも良いかの確認を事前にとっておけば、学習館でも西砂会館でも天王橋会館でもどこでも出来る様になる。そのエリアのお母さん達、お父さんにとって参加し易くなるかもしれない。その部分で講師の方も素晴らしい人を紹介して貰ったが、企画者の母体として外に出ても良いのかを確約をとっておけば活動の幅が広がると思う。

加藤：2回目は西砂会館で開催をお願いすることを決めた方がよいと思う。

岩元：お父さん、お母さんがお料理を大変な思いをしてらっしゃると思うので、料理の講座だったらよい気がする。

大橋：小笠原委員、4月までに調べて頂いて大丈夫ならば広瀬委員が仰ってくれたように場所を変えて行うことを計画してみてもいいのではないかなと思う。広瀬委員、2回目の開催は△にしておいてその前に小笠原委員に調べて頂いて大丈夫ならば西砂会館で開催する。

石川：他の講座と違って「夜間塾」は地域の小・中学校を対象にしているので、市の広報には掲載しない。6月に行う講座でも4月に決めれば、チラシをこの辺りに巻いて講師と調整するので6月開催は4月中に決めても可能と思う。

加藤：「夜間塾」を行おうとすると何月開催にするか。先程小池先生の話が出たが、小池先生に市民推進委員会の講座を9月下旬頃西砂学習館で行う予定。

大橋：2回目の後半回なら重なるかも知れない。

広瀬：「地元を学ぼう」でこの前に出た意見としては豊泉喜一先生に2回講座を行ってもらおうと意見が出ていて、私の考えとしては2回を細かい民話等ではなくて立川全体

のことが1回、西砂地域のことが1回行ったら良い。外から来た人の為に立川のことを知らない人もいっぱいいるので、そのような形で行えたらいい。その形での年2回の考え方もあるのではないかと思う。

大橋：年2回開催と話しましたか。

広瀬：そうです。

加藤：前回話をして年2回の方になったと思う。2回は全然違う2回となっているので別の講座としてではなく、豊泉先生の講座として1~3週間開けて2回を開催したらいいと前回思った。最初に立川市全体の話をして、今度西砂の話をして1つの講座として2回行う意味ですね。

大橋：その話になった時にお金のお話が関わってくる。生涯審でも話をするが活動主体の意欲があるところはこれもあれも行いたい形になってしまう。結局スクラップビルドになってしまい、どれかを削らないと出来ない形になってしまうのでお金はほしい。

石川：上手く行えばお金の使い回しが出来るかもしれない。学習館ごとに講座があり、6館横のつながりでプロジェクトがある。子ども関係や平和人権等市民科講座等色々ある中で、私が担当しているのは環境プロジェクトで、毎年3万円の講師謝礼が付いている。予算の科目が同じで来年度も講座開催がほぼ確定したのが、立川産の田んぼで採れたわらを使った「わらぼっちを作しましょう」の講師謝礼は1万5千円なので、差額を使えたらと思う。

大橋：どこの分野からかお金を持つてくることは出来ないですかね。

石川：そこから持って来てしまうことも1つのアイデアと思う。早いうちに各館に調整をし、西砂が使いたい旨を表明すれば使える場合もある。

豊泉先生が講師料は無料でも良いと言ってくれている。持っている知識を次の世代に引き継ぎたいと仰っているので、出来れば若い方に参加して貰いたい。前回若い方を集めようとしたが参加は無かった。場合によっては豊泉先生に講師謝礼の交渉もできるので、2回開催は可能と思う。

大橋：若い人の参加は十五夜だと子どもが沢山参加してくれると思う。当然若い父親や母親も一緒に参加してくれるのではと思う。地域の若い人達に参加してほしい。立川市全体の学習と西砂エリアの2つの講座を立ち上げることも良い。豊泉先生が元気なうちに講座を開き知識を吸収出来たらと思う。

岩元：期間を空けないで連続講座の形でもいい。

大橋：2~3年と連続していても構わないか。

広瀬：場合によっては良いと思う。豊泉先生の講座は出来るだけ継続するのが良い。

大橋：広瀬委員が仰ってくれたもので課題になっている部分がある。アクティブラーニングの手法としての講座、もう1つは大学生の国立音大生の起用等をどのように企画するか。このエリアになると音大生や楽器と触れ合ったり、今まで見たことのない楽

器を紹介して貰うこともあるのかもしれない。そのことから大学生の講師を開拓してみてもどうか。

広瀬：私はアクティブラーニングにこだわっている訳ではないが、サマーイベントの5日間のイベントとして出来るだけ学校の授業や、学校で行わないことの方がいいのではないかと思う。図書館の人達が毎年行ってくれていてすごく良いなと思っているところがある。学校ではなくて自由に考えて色々行ってくれるが、その意味で学校とは別の違う雰囲気で行った方がいいと思う。その意味で1日を気楽な内容での意味でアクティブラーニングを例として出した。

5日間の中でパン作りもあるが、2日ある科学の内1日を気楽な形で授業を行った方がいいと思う。私はたまたま料理を行っていて、大橋会長と午前中の授業を見させて頂いたが、学校の雰囲気でない方が子ども達は喜んでいる気がする。あまり学校的な雰囲気を出さない方がいい。そのような備えを来年度行ってみてもいいと思う。

大橋：サマーイベントの講師は市民リーダーに交渉して講座を組んでいるので、私達自身は全く悩まないで、5枠を作れている。広瀬委員が考えていることがもっと具体的に分かればいいが、講師を誰に行き行って貰ってどんなものを自分たちが考えていけなくて、講師を探さなくてはいけないとなってくると1企画を行うのに相当な労力が必要だろうと思った。出発点は前係長と自由研究のお手伝いになるような、科学的なものを取り組んだらと始まった部分もある。レンズを使ったり日光を集めたり色が変わる科学的なもので、頭を活動させてワーク的なものを使った部分で取り組んで来た。学校的でないのはどのようなものを学校的でないと話しているのかが分からない。

広瀬：午前中の2時間なら2時間の進め方を学校の先生のようにきちんとして、結果もしっかり出すような、がんじがらめにしないで行ってもいいのではと思った。参加者の小学生が楽になるように楽しそうに行き行って貰いたい。夏休みの宿題は午後にはきちんとして行くことを抑えたらと思う。

大橋：イメージが分からない。きちんとして話すことは、まとめ方がしっかりとしていたので真面目に見えるという意味なのか、流し方自体がきちんとして真面目と思っているのか。

広瀬：当然事業ですから、きちんと。

大橋：片江先生や岩間先生は先生だからそのような流しを行えている。私はそうなるようにまとめているだけ。

広瀬：先生はプロだからきちんと行ってくれるのだけれども、私は子どものプロではないので、子ども達の表情を見ていると漠然としているがあまり学校と同じような感覚ではない方がいいと思っている。

大橋：具体的な何かあるといいと思う。

岩元：1年生から6年生まで楽しく過ごせる具体的なものがあればいいと思う。

大橋：それが何か分かり具体的なものがあればイメージも湧くと思う。

加藤：去年各委員がみた形では子どもたちはのびのび行っているようにみえた。

広瀬：あの時は比較的に自由だと思っている。みんなが付いていけていた。おじいちゃん・おばあちゃんとの接触もあったりして非常に良かった。あの辺が学校的ではない。

岩元：例えば、昔の遊びみたいなコマ回しやけん玉等を2時間行うのだったら楽しい感じがする。

広瀬：そのようなものだったらいいと思う。理科の実験みたいに行う場合、とても間をつめて行う。そういうものは理科で行ってもらってここで行わなくてもいい。

大橋：理科で行えていない子ども達が興味を引く課題や問題を片江先生達は提供してくれている。あのようなことを理科の授業で出来ないし、家庭であるもので、色がこんなに変わる不思議を体験させてくれる為に作ってくれている講座で、片江先生達の講座は学校でも出来ない講座と思う。学校でもあそこまでは出来ないし行ってくれない。岩間先生が行ってくれている講座も本当はあの遊びを行う為には、前段階で2時間作らなくてはいけない。岩間先生が家で作って来てくれるから、使って試行錯誤の部分を提案できるのだけれども、本当は準備の段階からすると相当なものと思う。一番楽しい・考えてほしい部分を先生達は提供してくれていると思っている。子ども達1年生から6年生までバラバラの主体的な深い学びの手法を通した形で何か講座が2時間で組めないかと相談してみようと思ったら、会合がなくなってしまったので、広瀬委員に時間を下さいと話をした。サマーイベントの1講座が自分でイメージが湧かない。

加藤：確かに学芸大の学生に2時間なら2時間、そのような狙いで依頼すればいくらでも行ってくれる。それは錦学習館等で行っている単なるイベントと違って、我々は5日間の中でこのような狙いで行うのだから2時間で行ってくださいとなれば学芸大の学生は先生も指導することですから、きちんと行ってくれる。

大橋：ですが、市民リーダーの方達はそのような形で2時間のプログラムを組むことはないと思う。

広瀬：何も市民リーダーの人を全部使う必要はない。市民リーダーにこだわっていないですよ。

大橋：市民リーダーの冊子もあり、リーダーに依頼するのはセッティングし易いからだと思う。だから5つの講座も決まるのであって、そうでなかったら広瀬委員のリクエストを考えて、講師を決めるのにまず学芸大の先生に連絡をしたり、何処に一報を持って行ったか良いかということから始まる。今まで簡単に考えていたが、講師選定の手続きもとても大変なのではないかなと思う。今まで簡単に決まったのは市民リーダーの冊子があり、みることが出来るから直ぐに5日間の枠が決まるだろうと思っている。その苦労の方がすごく大変なのだと思っている。

広瀬：市民リーダーに投げられている枠は2つで、後は図書館等になっているので確かに市民リーダーの人にも協力してほしいし、良いチャンスなので行ってきた。ただ何回も行っているとマンネリ化している部分もあると思うので、1つくらいは変えた方がいい

いかなと思う。

加藤：多摩川未来パークで今までも行っている中で、人形を作る講座があり子ども達は勝手に
に行っている。なぜ話にしたかと言えばその先生が松中団地の1号館におられる方
で、すぐ近くに住んでいる方で思い出した。子ども達が人形の絵を書いたりするよう
なことはあちらこちらであると思う。今まではそのようにして講師を見つけてきた。
思いついた話をしてみただけで行わなくてはいけないという訳ではない。

大橋：自由研究的のところ取り除いて自由制作の例えばドングリを拾って来て、トトロを作
る等、実際子ども達と活動してきてものづくりみたいなものを1つ入れたらいい。

加藤：勉強よりも遊びをしていったらいい。うどん作りもそうであった。

大橋：アクティブラーニングの言葉が、文科省では使っていないはず。主体的な深い学びの
ような言い方をしている。それは享受法の1つの方法論になっている。そのことを使
って最終的子どもがどれだけのものを発見したかや子どもの変容は言葉にして出し
ているが、1つの指導法だからそれはそれでいい。アクティブラーニングとどングり
を使うのはどうなのかなと思う。

広瀬：2時間ある内の国立音大の学生に時間をうめてもらう訳だから、狙いや行ってほしい
事柄を伝えれば問題ないと思う。

大橋：サマーイベントでそのようなものを行ってもらったらいいと言う意味ですね。

広瀬：1回はそうして貰いたい。5日間で西砂のサマーイベントを大々的に謳って行って
いて4~5年繰り返し行っているの、更に良い方向に充実していきたい。

大橋：広瀬委員の言葉の中の「いい方向」と「マンネリ」の言葉の意味が分からない。毎年
同じことを行っているから、「マンネリ」と話している訳ですか。

広瀬：2年は続けていく。

大橋：誰がマンネリと思っているのか。

広瀬：私です。

大橋：子ども達の為に行っているのであって、「マンネリ」ではないですよ。毎年また来年
を子ども達が参加したいと書いてくれているので「マンネリ」の言葉には該当しない
と思う。参加者は毎年同じとは限らない。だからいつも豊泉先生の話も同様だが今ま
でずっと会議をしているときに、2年間行ったから変えた方がよいとの話をするが、
対象者は毎回同じで来てくれて飽きたから3回目は来ないとは、違うのかなと思う。
男の料理教室も今まで行ってきたのでなくしてしまった。砂川との歴史の話も何年
か行ってきたからと辞めてしまった。参加者は毎年違うと思うし、認知症講座は毎年
行っても良いと思う。冗談でお金がかからないと話してはいるが、参加している人は
同じであっても1人でも新しい人が来たならば、行っている意味はあると思う。「マ
ンネリ」と言われると、違うと思う。

加藤：子ども達もずっと年齢が上がって来ているので、毎年来てくれている子ども達もいる。
その子ども達は去年も同じとは思わないが似たようなことを行ったなと思うかもし

れない。

大橋：岩本委員に声掛けられて同じようなことを行ってほしいと言われていた。「違うことを考えているよ」と仰っている訳だから、同じことを行っている訳ではないと思う。

広瀬：「同じ」ではなく「同じような」と話しています。

大橋：分かりました。

広瀬：例えば図書館の人達が行ってくれるサマーイベントはマンネリしていないと思う。よく考えて教員でない人達が行ってくれていると感心している。

森：私はマンネリと感じたことはない。子ども達も毎年来てくれていたとしても1年に1回たった2時間行ったことを、去年と同じことをしてつまらなかったと感じるほど記憶に残ってはいないと思う。その程度のスパンで行っているものなので、委員は毎年いるから思うかもしれないが子ども達にとったら1年に1回、行ったか行っていないか位の程度に思っているの、そこは良いと思う。私が去年感じたのは折り紙の内容が少し難しかったと思った。1年生～6年生までの子ども達が集まって同じことを楽しめる2時間であることが1番なのかなと思った。結局参加したけどつまらなかったから次は参加しないとならないように、簡単でも出来た喜びがいいのではないかと思う。もしかしたら6年生には少し簡単であったとのことでも1年生が楽しめるればまた、残り5年間また通ってくれるかもしれないし、いろんな考え方はあるかもしれないが、私はそのように感じた。

うちの子に自由研究の中で科学の研究を行わせたこともなくて、うちの子に行わせたことを考えると、市役所に行かせて1階から各課に行かせてインタビューをして内容をまとめさせた。そのことも研究なのかなと思った。あとは物語を1冊夏休みに作らせて主人公の名前から全部作らせて本にさせた。我が子の中ではどういう様にお話しを組み立てたりしたら良いのだろうと考えたりしたことが研究の1つかもしれないと思った。あまり科学等にこだわるのではなくて、例えばどんぐりの人形でも作るだけではなくて、クルミ等沢山の材料があるとプラスアルファの情報をお勉強させてあげるとかそのようなことがあれば工作でも良い。行ってくれる講師にある程度の内容を伝えて、お願い出来れば解決出来るのではと思う。

大橋：実際に科学的なもの等にこだわる必要はないのではないだろうかのご意見を頂いたので、その部分を参考に出来ればと思う。

理想は砂川学習館で水曜日にこの講座を開いてくれて、講座が重なることがなく開催出来たならば、広いエリアで自分の学習したい内容に移動出来たら良い。1館だけで5回しかない内の2回の内容。パン作り・児童館・図書館が入ってしまうと2回の講座の内容を話しているものなので、本当は6館が同じような形で月曜日から金曜日まで出来れば講座の内容を考えなくても、特化別にしたもの内容の講座を開ければ子ども達にとって良い学びの場になると思うが理想論になってしまうと思う。また、石川係長と相談して講座の内容をどのようにしたら良いかの話をする。4

月になったらご提案ができればと思う。

大橋：個々の会議では議論したり討議したりする場。音大の話も出たので、実際行えるかの確認をする必要はある。児童館でも行えると小笠原委員から話が出たので、夜間塾や新しい講座を開く時に何か参考になる部分が出てくるかもしれない。その部分でもアタックする価値があるかもしれないと思う。

岩元：西砂川文化会の事業で今年のお茶摘みは密になるため、開催が難しいだろうと方向になっている。

大橋：今までは地域の方は参加出来ていたのですか。

岩元：出来ていた。特に西砂小の小さなお子さん、お父さんとお母さんが参加していた。

・西砂産業まつりについて検討

石川：前回の話しを踏まえて考えていることは西砂地区に介護施設が複数あり「サービス産業」の話がでた。他にも先端技術の工場があり、立川市工業会にお聞きすると何かが出来たのではないかと考えていた。産業まつりというとお祭りだから「ワイワイ」の感じかも知れないが、どちらかという「西砂の産業を知りましょう」の方向かなと思うところがある。そうすると西砂には介護施設があるよ、先端技術の工場もあるよ、場合によっては農業やだるまも作っているので産業を知ろうという方向がいいのかなと思う。地域の再発見の中に、産業まつりがあるのでここに住んで良かったとか、引き続き住みたい等やそのような心が湧いてくるようなものになれば良いのかなと思う。全体的にではどうしたら良いのかのところを狙いや方向性の趣旨等を再確認出来れば具体的なことが可能になるのかなと思う。

大橋：石川係長から話があったように地域再発見の事業目的のところに入っている事業名になる。実際に祭りの言葉自体が結局、地域を知ることにつながる。地域を知ろう・住んで良かった街づくりのネーミングの中のものではないかと思う。地域を知りながら西砂・一番町エリアの中の「産業はなにか」となると第1次の農業等や園芸も入るのではないかと思う。第1次産業と第2次産業で工業の精密機械等も入ってくる。第3次産業の介護施設の話もでたので、西砂エリアには目立った産業として興っている。その部分を年度の中で市民に知ってもらう部分が企画出来たらと思う。

石川係長との話は精密機械を作っている工場子ども用の倒れない歯車でコマを作っている内容をテレビで見た。子どもが懸命に行っている様子を見ながら工場製品を知っていき、工場見学みたいなことも計画出来るねと話をした。子どもを巻き込んだ形で地域を知ってもらえる活動へ広げていけたらと思う。そのように横道に逸れた形では膨らんでいくが、各委員を介してどのような目的や狙いで産業まつりを作っていったらいいのかを委員に聞いて、固めて行いたい。大元を委員で話し合い出来るだけ早めに提案して次回までに考えてもらいたい。まだ精密機械や工業の方も分からないので、また岩元委員に紹介頂いて出来るだけ色々な部分で情報を集めて

おかないと具体的な形に繋がっていくかどうか分からない。そのような部分を得ながら進めていこうと思う。そんなに慌てる必要はない。

岩元：松中小の学区が残堀川までいくのでしょうか。

小笠原：残堀川の少し手前位までいきます。

岩元：残堀川の手前まで学区区なのですね。子ども達の夏休みに設置物を表示する大きな地図に工業工場や小さな町工場をおとしていき、地図を見て今年はこちらにご協力頂いたりしようか等が見えて来たら素晴らしいと思う。小学校4～5年生くらいに社会科見学がある。

大橋：土地の使い方なのでそこまでの小さい工場地帯はバスでスーッと通り過ぎるので、この地域のにわとりを飼っている家などの情報を集めると、子どもを巻き込んだ形で使えそう。学習館が各地の拠点として学校と繋がる何かが出てくるかもしれない。そうすると色々な面白い物が出て来そうな感じがする。子どもが行った活動を会館まつりの時に発表すれば、地域の人に西砂ではこのような工業製品を作っているところがあるのだと分かってくれるのだらうと思う。何か発展しそうな感じはする。やっぱりいつも産業まつりだけで終わってしまっているところもあるから、狙いや対象を何にするのと話を詰めていけば具体的な活動を行うことが出来る。

小笠原：かなりの理想論になるが、立川市の事業でワークスが委託を受けている子ども委員会がある。自主的に集まってきた子ども達がテーマを自分達で決めて、半年間研究をして立川市に提案をし大人達に発表している。例えばこれをヒントに地運協で「地域を知ろう子どもプロジェクト」のような形で募集をすることが可能なら、子ども達に半年間なら半年間月に1回研究日のような形で集まり、その子たちに委員が数多のバックアップをするが、興味をもってもらうことは子どものためになる。子どもが研究していると親はバックアップせざるを得ない。親が色々調べて資料をくれたりする。そのようにして巻き込んでいける。ゆくゆくは1年任期だけれども来年も再来年も行って見て、子ども達が学習館まつりや何かの機会の発表で西砂小だけでなく松中小や第7中に入っていく、ここから生まれた子どもプロジェクト的なものを行えたらと思う。

大橋：小笠原委員が話していることは方法論だから、もしかすると出来るかもしれない。頭の部分を地運協で作らなくてはいけないかもしれないし、作ったならばこの活動を通して何をしたいのかはつきりさせないといけない。

進藤：カテゴリーは地域の再発見だから新しくそこで育った子ども達目線で発見したものの発表をみた大人たちが子ども達からはこのように地域が見えていると発見の意味合いではカテゴリーにすごくはまるかなと思う。お祭りのところで思ったが、体験会等や地域の産業に触れるお祭りというよりは行っているのは知っているけれどだるまの色付けを中々行う機会はない。難しいと思うが一部のきりとしたところで何かここに来て体験出来るようになるとさっきのコマ作りのところはビデオを流して、組

み立てるところは一緒に行っていく形で、触れ合うところから興味をもってもらえる。

大橋：森委員が話していたように産業まつりなのですが、狙い・趣旨を読み合わせて委員にこれは「西砂産業まつり」ではないよねと「産業をしろう」とのように名称が変わっていてもいいのではないかと思う。方法論として子ども委員会みたいなものを使って、探索に行つてそれをまとめて発表することもあるのかもしれないし、委員はこの企画として動くことも出来るのかもしれない。狙いや趣旨が明確でなかったものだから、何をどんな風に進めていったら良いか 2 人だったらこのようなものがない、あのようなものがないと進め易いが委員に投げかけて、頭の部分の辺りのところで何かいいアイデアがあれば良いです。これが学校と地域の共同事業にもなるのかなと思う。

進藤：方法が変わればとても良く喜んで大人は巻き込まれていく。

増田：立川市の文化があまり良く分からなかったので、ホームページで調べてみた。「街を知り・街に愛着を持ち・街の良さを受け継ぐ児童・生徒」と「街と主体的に関り街に貢献しようとする児童・生徒の育成を目指す」が趣旨になっている。他に「社会の為に役立とうとする人づくり」や「歴史や伝統文化を継承し発展させる人づくり」の具現化を図ると明確に書いてある。私ども「立川市の財政を考える会」では加藤委員と色々なことをさせて頂いているが、例えば山形県で早いうちの中・高校生から選挙が行われて定着を図っているところがある。立川でも市民課の考え方はとても良い考え方と思うし、今から行っていたことを同じ枠組みとして対象を小・中学生にすることを念頭に置いてものを考えていった時にまた違ったやり方・発想が出てくるのではないかと思う。

大橋：子ども達に地域が良いと思ってもらえる、最終的には子どもに還元してこのエリアに住んで良かったと思える子ども或いは地域や学校に色んな人材を持っている部分を出し合いながら作っていきましょうとなっている。

増田：大きなベースで行っている中であまり触れられていないとても良い言葉だと思った。

大橋：今、増田委員がアイデアを出して下さった。私達の地域の再発見とのことなので、立川市民科で提唱している街づくりの話もあるし、「街づくりは人づくり」・「人づくりは未来づくり」の話が進み、立川市民科になった部分もある。その部分も織り交ぜながら趣旨・狙い等のところを考えて具体的に出来そうなことの情報を集めながら、方法論として小笠原委員は「こども委員会」の組織を使って何かすることも出来るので、合わせて行いながらエリアを学ぶ新しい活動が出来たならば良いと思うのと、最後に話すコーディネーターとの兼ね合いもあるので、もしかすると連動するような部分で活動が広がるかもしれない。

石川：小笠原委員が話していた子どものプロジェクトの話ですが以前、前係長がいた時には西砂限定ではないけれども「子どもエコプロジェクト」を立ち上げていて、月 1 回程

集まり川の掃除を行ったり、田んぼの田植えや稲刈りの関係もあったりして一連の流れを行っていた。今はエコプロジェクトではなく、「田んぼの会」の形になり親子で参加してもらう形で、田植えから稲刈り・粃摺りの田んぼ中心になってきている。形としては「子どもプロジェクト」が学習館で立ち上がることは良いのかなと思うところと児童館の力を借りると常に子どもが集まる場所なので子どもを集めやすいと思った。特に西砂地域に限定するのであれば、西砂児童館と正しくコラボで行うと可能ではないのかなと思った。プロジェクトを作って西砂地域を歩いて何か不思議なものがあったならば、皆で行ってみようとか西砂の産業も含めて西砂地域を皆で知っていくことを行ったら面白いのかなと思う。

大橋：この話はまだ検討していきましょう。方向性も見えて活動としては面白いものがある。ある程度深い学びに繋がるような内容ではないかなと思う。或いは立川市や地域の人に提言出来ることがあるかもしれない。子ども目線で介護施設に伺ったらどんな様子になるのかなと思った。実際に子ども達が交流しているが、私達の時代も定期的にデイケアセンターに行ったりして遊んだり交流したりがあったが、大人が見る目線とは違うものが見えるかもしれない。産業まつりの話は一旦終わりにします。

広瀬：産業まつりの話はこのままにしておきますか。「西砂産業を知ろう」でいいと思う。

大橋：もっと良いネーミングがあるかもしれない。これだけ色々と意見が出たので「まつり」ではなくて「知ろう」にしてはどうかと思う。第1次案としてまつりよりもエリアを知る意味合いが強いのではないかと思う。実際は知って・楽しむになるかもしれない。

3. 協議、報告及び連絡事項

(1) 前回の議事内容の確認（議事録）

大橋：前回の議事録は量が多くて読むのが大変だったと思う。ありがとうございました。

(2) 地域学校コーディネーターとの連携について

大橋：時間が限られているので話し合いは次回に。資料だけ1回目を通して貰い4月の時に少しお話し出来るかなと思う。話し合いをする上で今の学校教育や社会教育で実際に行われていて、増田委員は実際に立川市民科を調べてくれたが、立川市民科で西砂小・松中小・7中・学校協働本部で行っていることのまとめたものを掲載したので目を通して頂ければと思う。

石川：地域学校コーディネーターの何人かの方にお会いしたところ、3月末で任期が終わる方がいる。4月にメンバーが変わるのであれば、新しいメンバーが決まったところで日程調整をして、出来れば5月には開催したいと思っている。開催日は西砂小と松中小と7中の3校から必ず1人は出られるような日付を設定して、委員が合わせるような感じにしたいと思う。

大橋：現在では7中が1名、西砂が2名、松中が4名だったと思う。

(3)「西一元氣通信～西砂学習館便り～」を配布しました

石川：タイトルの元気の「き」は、小林委員が書道で書いてくれた時に今の「気」ではなく昔の「氣」の字を使って頂いた。ネットで調べると「氣」の方が良いらしいです。八方に気が伝わるということで本当に皆元気にしてくれる。今の字の方は、める意味合いがあり気が出ていかないらしい。小林委員に書いて頂いたタイトルは大正解だったなと思う。

回覧版を添付させて頂いた。回覧の字が付いていないものは西砂小・松中小・第7中や児童館・学習館等に配り、プラスして今回は一番福祉会館・こんびら橋会館・上砂会館にも配布した。回覧は残堀川より西側の自治会なので、私も最初は知らなかったが西砂川自治会は西砂町の自治会と思ったら松中団地等一番町のところを含めて、入るとのことで砂川地区は残堀川よりこちら側で4つの自治会は砂川のところも含めて、22自治会で直接自治会長のお宅へ行き直接お願いをし、不在時はポストに投函し全て終わった。立川市のホームページやみんなの西砂川にもアップする。他、西武立川駅の掲示板や西砂学習館に掲示。この創刊号は別に置き、マス刷りしていきたいと思っている。創刊号が出たからと言って油断は出来ずに次を考えなくてはならないと思う。出来れば学習館まつりは絶対やるぞと実行委員会でお話しをしているので、学習館まつりの関係やサマーイベントは掲載したいと思う。また、地域の方の協力やお願いの関係はこの回覧に掲載したいと思う。サマーイベントとして配るものとは別にして色合いが違ったものとして出せたらいいと思う。次回はA3サイズのパタンと畳んだものにするので、今回発行したものの倍の紙面になる。西砂の地域情報や地運協の活動報告も入れ、1面は目が引くようにしてタイトルと写真で、あまり難しい感じではなく手に取ってみたいくなるようなものを考えている。発行月は、今回3月に出したので、3月・6月・9月・12月に発行の話になっていたが、5月末が学習館まつりなので、6月早々に発行しないと自治会の回覧は翌月回しになってしまうので、いっそのこと7月位にして6月に何とか学習館まつりを入れるのはと思う。1案になるがこのようなスケジュールで、学習館以外のところはなるべく早めに原稿は作りだして準備をしておけば、こんな感じで出来るのではないかなと思った。

大橋：先ず石川係長に3月・6月・9月・12月の前半部分のプロットや記事内容を全部拾って出さないといけないし、最終的には紙面割をするのだろうと思う。実際はいつまでに記事を集めなくては、或いはいつ発行しなくてはいけない等や4回にどんな内容のものを入れるのかの部分先ず1番初めに作られていないと紙面が組めないのではないかなと思う。次回にでも3月・6月・9月・12月のプロットとしてこのようなものが載りますとの中身を出してもらい、それに付け加えてもらったりして進めていったらいいし具体的なものがあつた方が良く思う。

広瀬：これから4回発行を行った時に大橋会長や事務局の方だけをお願いするのではなく

て、手分けして委員も手伝えるようにした方がいいと思う。

大橋：プロットが 4 回分あると例えば広瀬委員が担当でここはこのように変えて置いて下さい等の詳細が決まると思うので一覧が出てきたところで実際のお願いをしたらと思う。私や事務局だけ担当するよりも各委員にプロットを担当してもらえたら良い。

石川：どんな中身の記事をあげるかについて大まかに一旦作ってみる。差し替えがあれば、都度変更していく形で良いか。

大橋：原案がないとそのような話も出来ないから原案を先ず 4 月に提案しましょう。飛び込みの記事があるかもしれないがそれは大丈夫と思う。学習館まつりについては「便り」や PR のようなものは出ませんか。

石川：出ます。チラシを作って自治会にまきます。

大橋：西一元氣通信と重なって大丈夫ですか。

石川：西一元氣通信は報告になるので、終わった後の報告は回しません。

大橋：広瀬委員が仰ってくれたくれたことは大変ありがたいなと思った。各委員に分担してもらい記事を書いてもらったりまとめてもらうこともしていきましょう。

(4) フリースペースについて (報告)

小林：再開予定の 5 月にならないとですね。

(5) 各委員から報告及び連絡事項 (報告)

加藤：中々コロナが収束しないが、市民推進委員会の対応状況だけでも伝えたいと思う。

市民推進委員会では先月から判断して 30 人以上集まる講座、毎週行う連続講座については中止にした方が良く判断した。夜間行う講座についても中止となっている。3 つの講座を中止にしたが、単発の参加者 30 人以下の講座については行っている。この前も森委員が講師のパソコン講座について 10 人参加で行った。連続講座だが開催 OK とのことで、参加者からは「ありがたい」と非常に好評であった。これから予告として出来るだけ西砂学習館で開催の講座を考えたいと思っている。特にパソコンを使う講座や料理の講座など交流が多い講座を進めている。差し当たり 4 月から犬の講座を開催する。本来は去年行う予定でしたが、コロナで 1 年延期したので今後 4 月から 1 年遅れで行う。去年、一昨年に子ども未来センターで開催していたが、その時に委員の中から意見が出て西砂の近隣では犬を連れて散歩をしている人が沢山いるので、なんで西砂学習館で行わないのとの話が出た。昨年講座として予定していたがコロナで中止となってしまい、また翌年のこの 4 月に講座を行う予定。犬を飼っている方は是非参加して頂けたらと思う。テーマを 1 つ増やしてコロナ禍でいかにワンちゃんと過ごすべくコロナ対策をしっかり行い、楽しく過ごせるアイデアを話してもらえるようにしていく。9 月には小池先生に講師になって頂き料理講座を行いたいと思っている。5 月には錦学習館で行う予定の料理の交流講座はどうなるかなと思っている。開催が難しい

のではないかとの声が出始めているので、気にしながら案内していきたいと思う。

広瀬：シルバー大学のボイトレ講座が一番福祉会館の工事が遅れているので、全部西砂学習館で2月、3月中は行う。この前2か月ぶりに開催したが相当人数が減っていた。シルバー大学側で連絡をしっかりと行ったが、それでもやっぱり減ってしまい仕方ないと思った。コロナ禍で特に高齢者の人達が心身ともに弱りがちだが、社会との関わりが大事な中で極端な話、運動していても社会との関わりが役に出て前に出やすい。運動しなくても社会に関わっている人の方が、元気だと研究成果が出ている位なのでその意味でも何とか関われる場づくりを委員が行わなくてはいけないと思う。只、緊急事態宣言が出ているのでその間は慎重に行わなくてはいけないと思っている。

進藤：前回もお伝えしたが広報に「街パ」、若いお母さんの地域デビューの話が今回オンラインで載っております。「街パ」自体が3月10日の締め切りで、開催は3月13日。ご参加頂ければ嬉しいです。もう1点は内示がでて、4月1日付で富士見包括に異動になった。内示の段階なので地域の方にはこれからの挨拶になる。後任は生活支援コーディネーターの高齢者に特化したコーディネーターのアサミが4月1日から来る。次回の地運協は一緒に参加。

小笠原：私の方は異動なしです。3月21日にまつりに代わる「子どもステーション」を立ち上げて今日から受付をスタートしているのですが、昨日の段階で緊急事態宣言が延長されたとのことで、21日までだった場合全中止になる。子ども達も職員も一縷の望みをかけて、もしかしたら少し早く解除されるかもしれない。1日でも解除が早くなったら行ってもいいよとお墨付きは出た。祈りながらダメ元で受付している。子ども達はかわいそうだし、職員も心配している。もし中止になった場合にはいくつか考えていた内容を定例行事や5月2日のフェスティバルにまわしながら子ども達へのチャンスはとり逃さないようにと思っている。毎年3月に行っている地域交流会も立川市全域で中止となっているので、また文書をもって報告とさせていただきます。

児童館としては4月からはほぼ通常のコロナ前の近い状態に戻りたいというのが育成を含めた状況。食に関しても行事では食べても大丈夫になっている。只、今よりも自由に食べるおやつやランチタイムは何処で誰が何を食べていた等の後追いが出来づらいので、行事の中の食は大丈夫となっているので1つ進歩かなと思う。大型行事、例えば宿泊行事や遠足行事はまだ制約がかかりそうなので、それにかわることを職員で模索している中、地運協でも話が出た児童館と出来ることのコラボで逆に言うところ児童館としても運営の中で別の視点で外へ行けるチャンスになるので、ありがたいなと思っている。1年後には児童館の契約更新があり、令和5年の春から更新できるかどうかなので、4年の秋にプレゼン等の更新申込を行うことになっているので、私達としては勝負の1年になっている。子ども達にとってどんな居場所が1番良いのかだけを考えながら行っていくのでまたお力をお借りすると思っておりますどうぞよろしく願いいたします。

長谷川：青少健では西砂川便りを年2回発行している。これは自治会単位で回覧が配布される予定。その中に先程市民科を調べて頂いたが、松中小の市民科は麦刈りや麦ふみ、麦もみを行い、収穫した麦を小麦粉にして学校の授業でお菓子を作り販売したとのこと。そのことが掲載されているのでご覧下さい。

大橋：企業プロジェクトと一緒にケーキ屋があったのですよね。

進藤：松中小の企業プロジェクトで出た収益を社協のコロナ基金の方に頂いた。来週校長先生のところにお礼状等を持って行きます。「街ネット」の5月発行分にも載せて小学生が行ってくれた取組のPRをします。

岩元：松中小の児童の生徒のお父さんが日本農業新聞にお勤めで農業新聞に松中小のプロジェクトの様子が出ていて、別の新聞にも掲載されるとの内容が出ていた。

大橋：地域の人達が色々な形で学校の教育活動に関わっている。その橋渡しを学習館が持っている人材・場所を学校とコラボして何か出来ないかとのことを学校コーディネーターと話し合いを進めていこうが地運協で企画している会議になる。たまたま立川市民科だけになるが実際には地域学校協働本部のエリアが広い形で活動が進められるのでありがたいと思う。具体的なものが見えて来ると少しずつ形が見えてくると思う。

加藤：市民科のことがこのような感じで読売新聞に2週間位前に載っていた。

大橋：朝日新聞には多摩版に地域学校協働本部で行っている「学校林を守っていこう」が載っていた。

長谷川：小笠原委員のご希望にお応えしてフードパントリーを行う。青少健も活動がなかったので表紙を見ていれば分かると思いますが、大きな字で委員長が挨拶をしている。

岩元：文化会は来年度4月の総会は書面でせざるをえないように今なってきている。あとお茶摘みをなぜここでしなかったかと考えたら、主催が西砂会館で文化会がお手伝いに行く形だったので、この会議でお話しをしなかったと、思い出した。西砂会館の館長と分科会の会長が同じ方だったので、何かと協力し合いながら行事を進めていた。

大橋：お茶のマスコットみたいのを私が作りましたので、西砂小学校でお茶の体験を行っていますのでまだマスコットがいきていると思った。主催が違った訳ですね。

岩元：文化会はそのような状況ですが、コーラス槐のメンバーで3月は行おうとなっていたが今回も中止にせざるをえないとのことですとずっと歌えてい。参加さが高齢なので社会に参加していく・外に出ていく機会が今失われていることも何とかしなくてはいけないなど感じている。学習館まつりの参加も難しい。来週に役員会を開いてお伝えしたい。

広瀬：資料配布は文化会はいってないのですか。

石川：いっていません。

岩元：理事会は15人位です。

石川：20部お渡しします。

小林：フリースペースの再開について5月から兆しが見えてきた。各委員お越しく下さい。

森：西砂パソコン倶楽部は加藤委員のご協力もあり、2月エクセル講座3日間、定員20名のところ10名ご参加頂いて、無事に終了することが出来た。1週間開いてしまうと忘れることも多くあるので、3日間続けて行うことはとても良いことだと思った。先週2日・3日はパソコンのスキルアップ講座で、ウインドウズ10の「フォト」アプリを使ってムービーメーカーを動画風に写真を仕上げることを行わせて頂いた。この講座は定員10名のところ10名参加。無事に終了することが出来た。コロナ禍で遠くまで行けない人が多いので、近くで学習出来ることは良いことではないかと思う。参加者がまた来て頂けるように頑張りたい。

増田：立川市民ふれあい会議と財政を考える会では来年度の予定を計画中。来年度に是非行いたいと思っていることは、1つの地域のテーマに対して議会も行政も老人会等の地域の方々も含めた1つの問題に対して、取り組んでいくようなことをスタートしていきたいなと思って、色々な方々にご協力を得ながら実現していきたいと思っている。

石川：残念なことに2週間緊急事態宣言が延び、学習館の夜間利用も2週間出来なくなってしまった。保育室の利用についても午前または午後の1枠のみしか借りられない状態にしているが、4月まで延長になった。

良い話もあり、学習館内の整理・清掃を行った。講師控室と書いてある和室を片付けたところとても良いヤマハのステレオアンプが見つかった。Aクラスアンプなので今度クラシック音楽入門講座の時に使えるのではないかと思う。

大橋：石川係長が作ったプリントで、西砂小・松中小・7中のコーディネーターの人達がどんなことをしているのかをまとめてくれたのが「平成31年度の地域学校コーディネーターの実際の活動内容(抜粋)」。これを少し目に留めて下さい。私の方で作ったのは立川市の教育で平成31年度の実績をまとめたもの。この中に立川市の学校教育と立川市学校教育が目指しているものが載っていたので、それをまとめたのがカラー刷りの3枚。その中に先程出てきた立川市民科とは何なのかや、地域学校協働本部等についてが書かれている。目を通して頂けると学校が進めようとしている方向性や生涯審において社会教育の方向性で一緒になっていこうとしていることを分かってくれるのかなと思う。それ以外に具体的に平成30年度の学校協働本部事業活動内容が西砂小の学校運営協議委員で頂いたもので7中が行っているもの、西砂小が行っているもの、松中小が行っている学校協働本部事業ともう1つ7中学区が行っている市民科の例や松中小・西砂小の色々な具体的な活動内容が見える。学校と学習館が持っている人材を上手く合わせながら地域で子どもを育てていけないかと思う。学校と一緒に活動が進められないかとのことを模索していきましょうとの会議を行っていきこうとなった。学校が行っている活動内容を頭の中に入れて置けば、コーディネーターの人達と話をする時によりアイデアが出てくると思うので、目を通し

て下さいとお願いした。

次回：4月18日（日）13：30～